

日本英文学会 北海道支部 第 65 回大会プログラム

開催期間：令和 2 年 12 月 5 日(土) ～14 日(月)

開催形式：ウェブカンファレンス

日本英文学会北海道支部

日本英文学会北海道支部第65回大会プログラム

〈文学部門〉

研究発表

1. Female Crossdressing: Unhistorical Queerness within *The Roaring Girl*
北海道大学大学院 Ozge Canbul
2. 難破船に残されたトランスジェンダーの世界
北海道大学大学院 白井那奈

〈語学部門〉

研究発表

1. 英語前置詞onの迷惑・不利益を表す用法に関する分析
北海道大学大学院 松村大寿
2. 使用依拠モデルに基づく第二言語指導の実証的研究—帰納的指導による英語習得の経緯を観察して
北海道大学大学院 泉 瞳

セミナー1 (11:20~12:10)

- なぜ英語は主語と助動詞を倒置するのか
札幌大学 時崎久夫

<発表要旨>

<文学部門：研究発表>

Female Crossdressing: Unhistorical Queerness within *The Roaring Girl*

Ozge Canbul (北海道大学大学院)

The gender-biased heteronormative social anxiety within the Renaissance culture requires an *other*, a queer other. The external misrepresentation and crossdressing of the character Moll Cutpurse, who is featured within Thomas Dekker and Thomas Middleton's play *The Roaring Girl*, engages with this anxiety.

The ambiguities and queer implications surrounding her sexuality and gender-bias-resistant identity call for an anachronistic queer reading. In order to bridge the gap between the historicist and unhistoricist approaches, it is ideal to borrow the term "lipstick lesbian," a homosexual female who is similar to the archetype *femme lesbian* since they both support a normative feminine appearance. However, lipstick lesbian may use her feminine apparel to conceal her sexual identity. Moll's lipstick lesbian status is amplified because of multi-layer discrepancies between internal and external self, thus both the term and her queer self throughout the play becomes inverted.

Queerness within the play operates on various interchangeable layers and leads the way to her acceptance, as long as she accepts her role as the queer female who is not the part of the predetermined heteronormative gender-biased social categories.

難破船に残されたトランスジェンダーの世界

白井 那奈 (北海道大学大学院)

Adrienne Rich (1929-2012) の代表的な詩集 *Diving into the Wreck* (1973) の表題作を「女と男」という二元論から脱した、現代のノンバイナリー・トランスジェンダー論を用いて分析する。詩集は、第2波フェミニズムの時代に家父長制社会の問題を描き出し女性の声を表現したものとして受け入れられた。Rich は詩人・フェミニストとして、言語の再構築により象徴的男性言語を脱し、一人称複数形 "We" を用いることによって埋もれた声を拾い上げていると論じられてきた。これまで、「女と男」に加えて両性具有という3つの性を前提 **No index entries found.** として詩を説明しているものが多いが、Rich の詩を理解するためには従来の両性具有論のみを用いるのでは十分とていえない。20世紀末から現在にかけて女性学における研究対象の性が排他的ではないかと議論されており、より包括的なジェンダー研究が注目を集めている。本発表では "Diving into the Wreck" を再読し、難破船に残されたジェンダーを超越する Rich の世界を検証する。

<語学部門：研究発表>

英語前置詞 on の迷惑・不利益を表す用法に関する分析

松村 大寿 (北海道大学大学院)

英語前置詞 *on* は、*It rained on me.* や *My father died on me.* などに見られるように、迷惑・不利益の意味で用いられることがある。これらの表現は日本語の「(私は)雨に降られた」、 「(私は)父に死なれた」にそれぞれ相当するものと考えられてきたが、このような *on* の迷惑用法については明らかになっていないことが多い。そこで本発表は、*on* の迷惑の意味はどのような経路で発生したのか、固着した意味なのか文脈によっては取り消されうるのか、迷惑用法の *on* は他動詞との共起例が少ないが文脈に応じて共起可能性が高まるのか、この3点について考察する。意味の発生経路については先行研究の記述を踏まえメタファー・メトニミー・シネクドキの観点から検討する。そして、英語母語話者を対象としたアンケート調査の結果に基づき、迷惑の意味がそれとは矛盾する文脈によって取り消されること、単独では容認されない場合でも適切な文脈内では迷惑の *on* と他動詞が共起することを主張する。

使用依拠モデルに基づく第二言語指導の実証的研究—帰納的指導による英語習得の経緯を観察して

泉 瞳 (北海道大学大学院)

認知言語学の使用依拠モデルは、言語使用からのボトムアップ的なスキーマ形成の観点から英語教育への応用の可能性が期待されている。具体的には第二言語習得理論の Focus on Form によるアプローチが、意味中心のコミュニケーションを通して帰納的に文法習得を促すものとして注目を集めているが、一方で指導上の時間的制約や効果的タスクの設定が課題とされる。本研究ではそれらの問題を解決する手段として「メタ言語」を効果的に使用し、「言語構造への気づきを促すタスク」としてゲームを用いた指導を行なっているケースを観察した。その分析に基づき、帰納的言語習得の有効性と指導上の課題を検討し、使用依拠モデルの第二言語指導における実効性を検証する。

< 語学部門 : セミナー 1 >

なぜ英語は主語と助動詞を倒置するのか

時崎 久夫 (札幌大学)

なぜ英語では、疑問文などで主語と(最初の)助動詞を倒置するのか。英語学習者が最初に習うことでありながら、この問いに答えることは難しい。生成文法では、助動詞の補文標識位置への移動を仮定して説明してきた。しかし、これだけでは次のような問いに答えられない。なぜ疑問文で、日本語のように助詞「か」や、中国語のように *-ma* のような小辞を節の末尾に付けないのか? また、ドイツ語のように定動詞を主語と倒置しないのか? これらの問題を言語類型論と音韻論の観点から考察する。世界の言語において、疑問文を倒置で表現するのは、主に西ヨーロッパの9言語ほどに限られており (Dryer 2013)、一般動詞の場合に助動詞 *do* を主語と倒置するのは、世界の言語の中で特殊である。本発表では、英語の語と句の強勢型とリズムが助動詞 *do* の発達を促し、主語との倒置による疑問などの表現を生じさせたという仮説を提示し、それを検証したい。